

街を歩くとどこからともなくキンモクセイも香りが漂ってきます。私はこの香りがすると小さい頃の村祭りを思い出します。稲刈りが終わった後に、年に一度の村をあげてのお祭り。屋台を出して組み立て、子ども達が引き回します。「ヤレヤレヤレヨー」という掛け声が今でも鮮明に蘇ってきます。

その屋台も今はもうありません。

今はテレビやゲームなど毎日の楽しみが身近にあります。病床の子ども達がそれによってどれだけ慰められているかしれません。しかし一方で、日本の農村の歴史が途絶え‘香り’による楽しい“思い出”や“文化”が子ども達に伝えられなくなったのは寂しい気がします。

今、親は子ども達に何を伝え、何を感じさせ残していけばいいのでしょうか。

< 第 2 回 ほほえみの会 >

今回は、のぞみの会（ガンの子どもを守る会）静岡支部会と合同で開き、およそ 80 人が出席しました。

講演は聖路加国際病院の細谷亮太小児科部長でテーマは「メンタルケアと家族の対応」でした。

ガンは大人も子どもも同じ言葉を使っているがその病気の内容は全く違う。大人の場合は胃や肺など空気に触れているところから体内に入ったところで発生する。子どもの場合は血液や骨、筋肉など身体の内部の所に発生する

ガン医療は 1960 年以降、放射線や化学療法が効果を上げてきた。それでも今から 15、6 年前までは日本ではほとんど治らない不治の病と言われていた。それが今では平均で 8～9 割が治る。

最近の治療で大きなテーマとなっているのは「ガン告知」「患者の権利」「インフォームドコンセント」「自己決定」
そうした中で重要なのは常に“希望”を持って話をすることが大事。それがたとえターミナルケア（終末医療）であっても「病気は治らないけど一度は元気になるよ」「苦しくないから安心して」「明日はいい天気だよ」などどんな状況であろうとも希望を与えることが必要。

白血球が少々少なくても家族で外出、外泊したい。また終末期は家族と一緒に過ごしたい。という時
医療は医師と看護婦のものではない。本人と家族と共にあるもの。病気の子と親、兄弟、その家族がどう暮らしたいかが大事で、それを医師、看護婦、ケースワーカーなどの医療者がどう対応するかである。

このほか 10 歳をめどに本人に話す「告知」の問題や「晚期障害」の話がありました。

病気に対してはあまり神経質にならない方がいいという話もありました。

細谷先生は歯磨きにうるさい母親によく言うそうです。

「歯並びがガタガタで性格の良い子」と「歯並びはいいけど性格の悪い子」ではどちらがいいですかと。

親にがみがみ言われることで子どもの性格までもが曲がっては何にもなりません。

懇親会では「ほほえみの会」に出たいが日曜日は外出が多く出席できない。他の日の開催も検討してほしいという意見がありました。みなさんのご意見は如何ですか。

次会は 月 日（日）12 時からです

ほほえみの会 代表 池田恵一